

各学校の判断で可能な“学力向上”策

—学習指導要領改訂の方向を見据えて

言語力育成の方法と課題

—「カリキュラムを貫く言語」指導

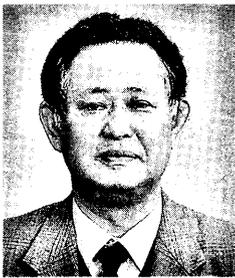
対応のポイント

- ①言語力という言葉を理解する。それは言語運用力と言語能力の連環関係から成っている。この関係は学校のみならず、生活のあらゆる場面において認められる。
- ②教師は、このような言語力を育成するために、柔軟なカリキュラムによって対応する必要性がある。それは具体的には学校（教科）内外にわたる複数のプログラムである。
- ③言語力のどの側面をどのプログラムによって育成するかを見定めておくことが重要である。この作業をしないと、実践は焦点を失い総花的になって、大きな言語力育成という方向へ向かっていかない。
- ④これからの実践的な課題として、カリキュラムの全領域にわたる言語力育成の内容と方法を開発することが求められる。

言語力とは…イチ

ローのメッセージ

「言語力」という言葉は、平成一七年七月に公布された「文字・活字文化振興法」の「基本理念」に「(学校教育の)課程全体を通じて『言語力』の涵養に十分配慮すべきこと」が明記されていることに由来するものと見られる。ここでは言語力は、「読む力及び書く力並びにこ



上越教育大学教授

有沢俊太郎

これらの力を基礎とする言語に関する能力」と規定されている。

言語力は、「人間の言葉にかかわる力」を包括的に指すもので、読む（聞く）・書く（話す）の「言語運用力（パフォーマンス）」と、人間がそのような行為にかかわることを可能にする「言語能力（コンピタンス）」の連環関係から成っている。この連環関係は年齢には関係なく、また学校や教科というような枠組みを超えて生活のあらゆる場面で見られる。その一端は、ブックスタート運動における三カ月児への読み聞かせの場面でも認められる。

この法案が準備されていた平成一六年、イチローは大リーグで安打数の大記録に挑戦していた。彼は記録達成の前後、次のようなメッセージを発信している（「イチロー262のメッセージ」平成一七年、ぴあ）。

● いろいろ考えてしまうのが人間ですが、でも、それを含めての「力」ですから（六月）。

● これまではイメージに結果が伴っていませんでした。それが伴ってきたらこ

ういうふうな（月間五六安打達成）なります（八月）。

彼はこれまでにクリアできたこと、そしてこれからも追求すべき課題を見事に言語化し、それによって自分自身の向上への道筋を見据えている。この発言には、学校の国語とか体育というような一教科の学習に帰されるのではなく、彼のそれまでの人生におけるさまざまな体験が「証明できないまま」（イチロー）溶かし込まれている。連環関係の強化は彼の野球人生が終わるまで続き、彼のメッセージには打撃の技術論を超えた深い人間性が「勝手に」（同）宿るようになる。彼はそれを「精神の成長」という。

教師に求められること…カリキュラム

ラム（プログラム）創造の意識

カリキュラムは本来、コースという枠組みを意味するので、生涯にわたってさまざまな場所で培われる言語力にはなじまない部分がある。しかし、教師が言語力の育成についてカリキュラム意識を持

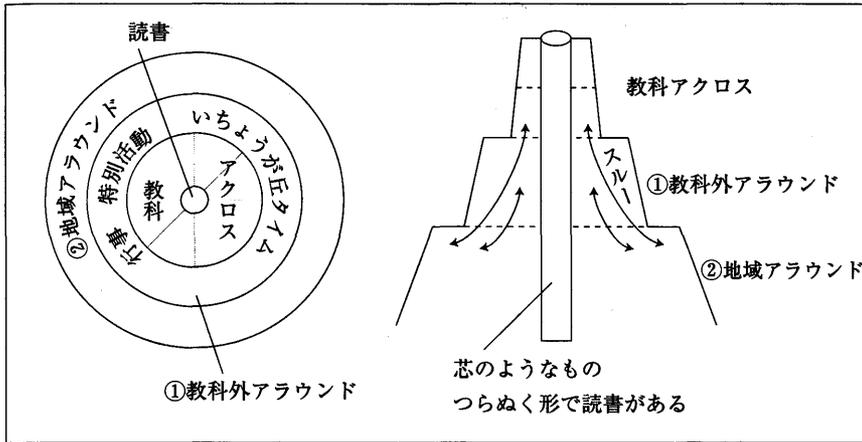
つことは、言語力を教育的なパラダイムに載せるために重要である。

言語力は平成一七年に法的に記された新しい言葉であるが、一九六〇、七〇年代のイギリスでは「カリキュラムを貫く言語」（Language Policy Across the Curriculum）という言葉がしばしば用いられた。この場合の「ランゲージ」は「言語力」、「カリキュラム」は「学校教育の」課程全体を指している。つまり、教師一人ひとりが学校教育活動の全体を言語力育成の観点から見直し、それに実践的なかたちを与えようというのである。

● わが国では倉沢栄吉氏に、
● 教師という仕事は、ことばに一番密接な関係を持つている。教育から言葉を引いたら何も残らない。すべての教育活動になくなくてはならないものが言語である。

という指摘がある（「ことばと教育」昭和五四年、学陽書房）。ここでの「ことば」（言葉・言語）は言語力であり、その育成は学校の内部だけではなく、学校を取り巻く地域や家庭生活を巻き込んで遂行されるべきことが主張されている。

図 下保倉小学校の読書カリキュラムモデル



わが国では学習指導要領がカリキュラムの大枠を定めているが、教師にとつてはそれが大枠であるがゆえにできる空隙が、言語力の育成に重要な意味を持つ。教師はそこに、国の方針（学校の方針）

を理解しつつ入り込み、児童・生徒の実態に合わせた言語力育成プログラムの設定と運営にいつそうの創意・工夫を傾けることが期待される。

原則的にこの種のプログラムには、全体的な整合性を有しつつも、児童・生徒の実態に合わせた弾力性と柔軟性が求められる。イチローのメッセージにしても、実は「悪戦苦闘」のなかの「ムダな経験」からにじみ出たものだという。このような混沌とした状態はどのような学習者にもあり、そのような状態こそが教育的には重要である。教師はそれに個別のプログラム（サブプログラム）で対応しなければならぬこともある。全体的な枠組みのなか、種々のプログラムを操作することによって、思考力や感受力に根ざした言語力は学校教育でもゆっくりと確実に培われるであろう。

プログラム創造の実践例

平成八年から一二年まで、新潟県蒲川原村立（現・上越市立）下保倉小学校では、言語力を読書力に絞って図のような

読書カリキュラムモデルを考案し、全校の教師がこの理念に沿った実践を展開した。これは「カリキュラムを貫く言語」(Language Policy Across the Curriculum) を次のように焦点化し、発展的にとらえた実践である。

●言語 (Language) → 読書 (Reading)
【焦点化】

●貫く (Across) → 取り巻く (Around)、しみる (Through) 【発展的追加】

まず、「言語」を焦点化して「読書」(Reading) とし、教育活動全体の芯 (コア) とした。読書 (3Rs の一角) は国語科だけではなく、教育の基礎的・基本的な活動だからである。また読書は各教科、教科外周辺部、地域・家庭でも行われている。そこで「アクロス」のほかに、「アラウンド」①②をつけ加えた。アクロスは各教科、たとえば理科における図鑑の読み、社会科における資料の読みの指導であるが、アラウンドについては、①は「教科外アラウンド」とも呼ばれ、いちょうが丘タイムという裁量の時間を活用した親子読書の授業があった。一年生がお母さんに読み聞かせるために

ペアになって練習をするのである。

②は「地域アラウンド」とも呼ばれ、家庭に配布された杉みき子作品を家族と読み合い、その結果を教室で続き話に表現するのである。

「スルー」は、地域や家庭生活が持っている教育力である。そこには明示的なカリキュラムはないが、この地域独特の蕎麦づくりの体験は独特の発言を生み出し、盛りあがりのある授業が展開した。生活上の知恵が授業ににじみ出すことを確認するには、どうしても総合単元に近い大単元が必要であったが、ゲストティーチャー等の参人も得て、変化のある読書活動の場を創出することができた。

こうして、学校の内部全体、周辺部において四本のプログラムを走らせた。「カリキュラムを貫く読書」に加えて、「カリキュラムを取り巻く読書」（二種類）、「カリキュラムからしみ出る読書」の四プログラムである。

実践にあたっては、プログラムに最適な読書活動を(1)～(4)のなかから選択することを申し合わせた。

(1) 発達の読書・読解、認知的読み、初

歩の音読。分析的に読む。

(2) 機能的読書…ある目的のために読む。情報を得る。調べて書きとめ、発信する。

(3) 娯楽的読書（創造的読書を含む）…興味・関心に従って読む。他人を楽しませる。

(4) 思索的読書…読んで考える。感受性を揺さぶられ、感銘をうける。

これらは互いに重なっているのであるが、実践的にどれかに重点を置くことは、読書力が表現力などとも連動していく過程において、きわめて重要であった。それは二対四面（読む・聞く・話す・書く）の言語力育成への第一歩であった（以上は、下保倉小学校「本とともだち」平成一〇、一一年収録の資料による）。

言語力育 成の課題

G・クレスという学者は、イギリスの初期の状況について、「カリキュラムを貫く言語」のほが「カリキュラムを貫く国語（English）」になってしまい、それが実践的な失敗を繰り返した原因であ

る、と述べた（平成七年、東京にて）。

たとえば「発達の読書」や「思索的読書」は国語科で行われることが適切であり、容易に各教科にクロスオーバーしていかないのである。また無理にそうする必要性もない。各教科・領域等で培うのにふさわしい言語力はどのようなものかを見極めることが重要であり、一時的にどこかの場所では、全体的に浅薄な言語力育成の教育になるであろう。

それで下保倉小学校では、四つのプログラムに四つの読書の類型を対応させて重点化したのである。しかしそれでも、理科の機能的読書に深さが不足しているという批判があった。この批判には、「理科でどのような言語（ことば）をどう教えるか」という問題意識が内包されている。

これは、理科に国語科の内容と方法をそのまま持ち込むことでは解決しない問題である。理科の目標を意識した言語力育成の内容（たとえば説明力）や方法（たとえばメモの活用）はいかにあるべきかを考えることが必要である。